

# 「白滝型」細石刃核について

栗島 義明

# 「白滝型」細石刃核について

栗島 義明<sup>1\*</sup>

## 要 旨

旧石器時代の最終末期には列島規模で細石器文化の展開が見られる。特にこの時期の遺跡が数多く発見されている東日本地域には、多様な形態の細石刃核構成が知られているが、後半段階には湧別技法による札滑型と白滝型の細石刃核を特徴的に認めることができる。

湧別技法による細石刃製作、特に札滑型については本州地域の全域に広く分布することが知られていたが、白滝型の細石刃核については長らく北海道地域に限定的に分布するものと捉えられてきた。だが、近年に至り東北地方ばかりか、中部・関東地域にも白滝型の細石刃核の存在が知られるようになってきている。加えて重要なことは、白滝型の細石刃核にはしばしば神子柴系統の石器群（石斧や石槍）が伴うことにあり、当該細石刃核が旧石器から縄文への移行期を特徴付けていた可能性がたかい。

本論では本州地域で出土した白滝型の細石刃核群を検討し、その技術的な特徴が従来から唱えられてきたものとは相違し、本州地域での在地化を遂げていた可能性を指摘した。併せて在地系の細石刃核へと与えた影響についての予察もおこなった。

キーワード：細石刃核、白滝型、神子柴系石器群、湧別技法、ホロカ型

## 1. はじめに

細石器文化についての位置づけやその理解については、現在、大きな見直しの時期を迎えているように感じている。既に北海道や九州地域で当該石器群の再検討が進められるなかで、関東・中部地域の細石器文化の再検討についても十分な資料蓄積を背景として、新たな研究展開の機が熟しているということも出来ようか。特にこれまで中部日本地域が主導的な立場と役割を負ってきた当該石器群について、新たに北海道地域と九州地域のそれぞれで総括的な研究成果が得られたことにより（山田2006；芝2011）、改めて中部日本地域での石器群理解への再検討や列島規模での広域比較編年研究の推進が急務となったと言えるであろう。

ところで細石器文化に関する研究現状を再検討するに

際し、著者が特に重要な研究課題と認識しているのが最終末段階の石器群様相に就いてであり、具体的には湧別技法による細石刃核の一群の理解にあるとすることができる。とりわけ湧別技法のなかでも細石刃核の打面部に擦痕を有する所謂「白滝型」<sup>1)</sup>の本州地域での存在は、これまでは極めて断片的なものであったが、近年に至り資料的な充実も果されつつあることで詳細な議論の土俵が用意されたことを痛感している。嘗て著者は神子柴系石器群の全国的展開を追求する過程で、それらの石器群が列島各地で異なった細石刃核型式との伴出関係を示すことを確認（栗島1993a）し、「北海道地域では・・・オシヨロッコ型と、関東地域では・・・削片系と、そして九州地域では・・・船野型」との関係性を保持していることを指摘したことがあった（栗島1993b）。加えて新たに報告された相模野地域での「長堀北や上野の細石刃核は、明らかに中ツ原や柳又の型式的・技術的な系統下

1 明治大学黒耀石研究センター 〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町1-6-3

\* 責任著者 栗島 義明 (yo\_kuri@meiji.ac.jp)

にあり、両者の時間的な差は従来考えられていた程に大きくない」蓋然性のたかい点についても触れ、細石刃核群に見られる石核構成が移行期の地域的様相を的確に反映している可能性に言及した(栗島1993c)。

その後は南関東地域での類似資料の目立った増加は認められないものの、東日本地域に視野を広げると湧別技法関連資料の増加に伴う新たな資料群、とりわけ打面に擦痕を持つ所謂「白滝型細石刃核」の存在が俄かに注目されるに至った。白滝型の細石刃核が当該期に組成する評価については、既に石器群構成の検討を基に基本的な考えと見通しについての意見を重ねて表明してはあるものの(栗島2000;2010)、その後に発見された新資料の分析・検討の必要性については、痛感しつつも比較研究を怠った点については反省せざるを得ない。しかしながら少数の研究者はこれらの資料群の重要性を十分に理解したうえで、各地での類似資料の探査とその編年の位置づけについての比較検討を試みている(芝2011;佐久間2015)。そのような中で著者は神子柴遺跡の再検討を通じ、長らく課題と認識していた相模野台地に於ける湧別技法細石刃核群の評価について、神子柴遺跡の石器群との系統性を視野に入れ再評価できる見通しを得ることができたことから、改めて当該細石刃核及びその製作技法について検討する必要性を痛感するに至った(栗島2020;2021(投稿中))。本論で湧別技法終末段階の石器群に関して再論する所以でもある。まずは東日本地域で検出されている湧別技法白滝型について、遺跡単位にそれぞれの石器について紹介した後、石器型式自体の特徴を検討しつつ基本的様相を捉え、その後に石器群が示す幾つかの問題点に関する比較研究及びその方向性について検討してゆきたいと考える。

## 2. 該当する資料群の概要

### 2-1 湯ノ花遺跡

湯ノ花遺跡は山形県西置賜郡小国町に位置しており、小国盆地を流れる荒川が形成した洪積世の中位段丘上に残されており、この湯ノ花遺跡の西側200mには横道遺

跡が存在し、東山遺跡や平林遺跡なども同じ段丘面に残されている。遺跡の発見は偶然発見されたホロカ型の黒曜石製細石刃核が端緒となっており、その後も細石刃石器群に関連する資料群が採集され、特に黒曜石製細石刃核の打面に擦痕を持つ一群が注目された(図2.1・2)。こうした資料の重要性を鑑み1973年に発掘調査が実施され、新たな黒曜石製細石刃核の検出には至らなかったものの、湧別技法の存在を示すスポールと共に擦痕を持つスポール(図2.4)も出土した(加藤1992)。改めて白滝型が頁岩製細石刃核(札滑型)と共に当該期の石核構成を担っていた可能性の存在することが確認されたのであった。

図2.1は素材として最大厚が約1.5cmの厚手黒曜石製の剥片を用いている。素材は平坦な自然面を打面として剥離された横長幅広の剥片であり、剥片の主要剥離面はそのまま残置する一方で表面側に集中的に調整加工を施し、8×5cm程の楕円形状の概形が形成されている。剥離面は素材中央部に剥離が及ぶ求心的なそれであり、横断面がレンズ状であるのに対して縦断面形態はD字状に仕上げられる。打面形成の為の剥離は楕円形を呈する石核原形長軸に対して斜め方向からの加撃によっており、都合3回の削片作出を認めることができる。この加撃は残された剥離面の状態から徐々に石核原形の長軸に対して角度が大きくなってゆく様子を鮮明に示している。細石刃の剥離作業を残された剥離面で観察すると、未だ本格的な剥離作業の展開はなされていないことから、3度に及ぶ削片剥離は細石刃剥離に伴う打角修正を一部で担っていた可能性を示唆していよう。注視されるのはこの削片作出を伴う打面の3面すべてに明瞭な擦痕を確認することができる点にある。擦痕はいずれも走行方向を同じくしており、削片作出毎にではなく打面形成が終了した時点で同時に付けられた可能性がたかい。

本遺跡からは他に1点(図2.2)石核打面に擦痕を持つ黒曜石製細石刃核が採集されており、その資料は面的加工後に削片作出のなされたものではなく、素材剥片の主要剥離面を打面として石核調整が進められたホロカ型の特徴を顕著に留めている。即ち、本例は湧別技法に特有な正面観が楔形を呈してはいるものの、細石刃核素材として用いられているのは3cm程の厚手剥片であること

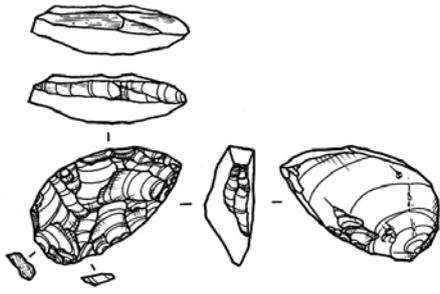


図1 越中山E遺跡



写真1 湯ノ花遺跡の細石器資料

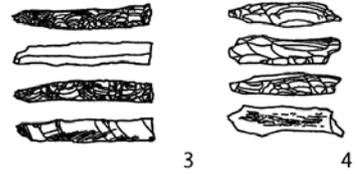
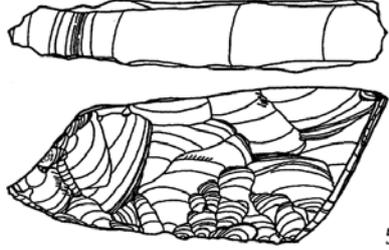


図2 湯ノ花遺跡細石刃核



写真2 葉菜山No.34遺跡出土細石器資料

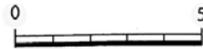
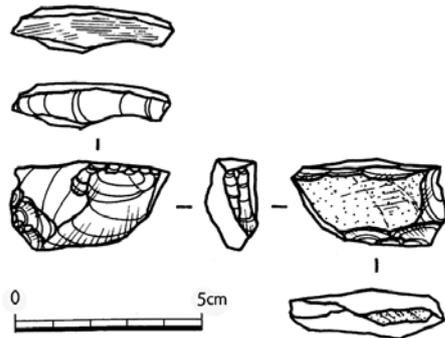


図3 葉菜山No.34遺跡出土細石刃核

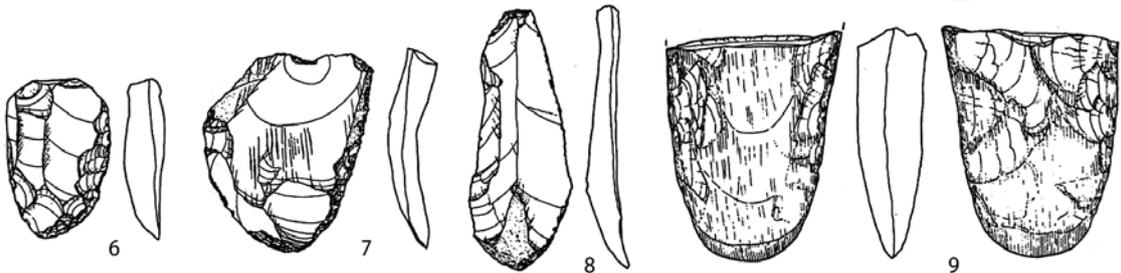
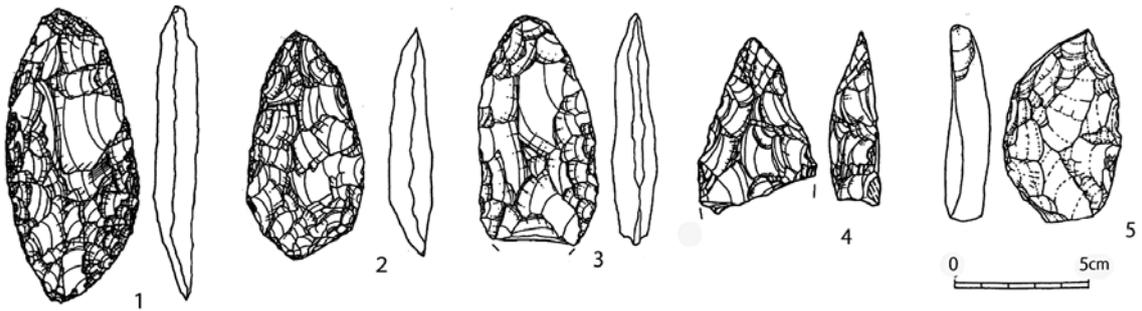


図4 葉菜山No.34遺跡出土石器群

が明瞭である。作業工程では素材厚手剥片の主要剥離面を石核打面としたうえで、その平坦な剥離面を打面として全周に及ぶ石核調整を丁寧にし、結果的に当該資料は上面観が長方形で側面観が三角形という、略楔形の石核形態が形成されている。細石刃剥離作業面は素材剥片の端部側に設けられており、背縁部には素材剥片作出時の打面を一部に留めている。

ここ湯ノ花遺跡出土の白滝型に共通するのは素材が厚手の黒曜石製剥片であること、そして細石刃剥離に先立つ打面部への擦痕の形成であるが、石核調整と打面形成に関わる製作工程に目を転じると両者には大きな相違点があり、同一の細石刃核型式として捉えるべきものでは決してない。ただし、本遺跡に於いて典型的な湧別技法による細石刃核が共存していた点については疑う余地はなく、器体調整痕を留めた黒曜石製スポールの存在は、石核原形として両面加工品が本遺跡へと持ち込まれていたことも示唆している。なお、採集品を含めた本遺跡の黒曜石原産地分析では脇本産を主体とし、そこに白滝産や深浦産、小深沢産などの黒曜石が混在していることが判明した（建石ほか2012, 2014）。

## 2-2 越中山E遺跡

山形県の鶴岡市に所在する越中山遺跡のE地点からも打面に擦痕を持つ黒曜石製細石刃核が採集されている（図1）。資料は「角ばった円礫を半割した剥片を素材にし、先に加撃面を長軸方向の単一加撃で作出……加撃面から一つの側面と背面のみを調整」（加藤1992）したものと紹介されている。長さは2.5cm、幅は1.1cm、高さは2.1cmと非常に小型の製品である。本例では片面に大きく自然面を残す厚手黒曜石製剥片を素材として用い、打面を形成した後にその打面から石核の側面調整を施して正面観が楔形の作業面を用意し、細石刃の剥離工程へと移行している。

本資料の素材となっているのは厚さ1.5cm程の石核素材としては薄手とも言える黒曜石製剥片であり、特徴的なのがその打面形成の仕方である。幅広の素材剥片の側面方向に相当する小口部側から加撃することで剥片の分断を進めると同時に石核打面を作り出し、略直方体形状の細石刃核を準備している。この後に打面に擦痕を施し

てから小口部側から細石刃剥離の工程が進められている。本例は湯ノ花遺跡の事例よりは、寧ろ後述する葉菜山 No.34遺跡例に良く似た資料と言えるであろう。

## 2-3 葉菜山 No.34遺跡

宮城県の北西部に位置する加美町に所在する葉菜山 No.34遺跡は、標高553mを測る円錐形の独立峰葉菜山の西麓に位置している。遺跡は葉菜山から東側に伸びる丘陵上に残されており、南北から浸食が進んだ馬の背状の丘陵部には僅かな平坦部が見られ、開発に伴うトレンチ調査の際に本遺跡が発見された。石器群は肘折軽石層下から検出されており、径が4m×5m程の第1集中地点とそこから南西に5m程離れた第2集中地点とに分けられている。二つの地点から出土した石器総点数は4,900点に及んでおり、その内訳は細石刃が総数88点（珪質頁岩製57点、黒曜石製16点、珪質凝灰岩製14点、玉髓製1点）、細石刃核2点、両面加工石器4点、片面加工石器1点、彫器1点、石斧1点、スクレイパー3点、彫器スポール6点と、非常にコンパクトな石器組成が報告されている（佐久間2015；宮城県考古学会2018）。

細石刃核2点のうち1点は珪質頁岩製で長さ2.26cm、幅1.35cm、厚さ1.32cmの小型品で、一部を欠損しているがホロカ型と捉えて良い資料である。問題となる黒曜石製の細石核は長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ0.85cmの小型品で、図3に示したように側面と下縁部位には平坦な自然面を残し、左側の石核側面には主要剥離面の残存が確認できることから、本例が黒曜石製の角礫表皮部分を除去した際のやや厚手の剥片を石核素材として用いたことが明らかである。剥片を小口方向から分断するよう加撃して削片を剥離し、その際の剥離面から若干の石核（側面）調整をした後、下縁部と背縁部に僅かな調整加工を施したことが理解される。打面に擦痕を施した後に細石刃の剥離作業を進めたものと考えられるが、本資料に残された細石刃剥離面からその作業面長を算出すると1.5cm～2.0cmの範囲に留まり、対応するように実際に遺跡から出土した黒曜石製細石刃（完形品）7点の平均値は2.0cmと非常に小型であった点は注視されよう。

本遺跡の石器群で特に注目される点は細石器群と同一ブロック内（第1石器集中地点）から搔・削器、彫器類

と共に神子柴系とされる石槍、そして刃部磨製の石斧が検出されていることにある(図4)。磨製石斧は欠損品であるが緑色凝灰岩製の両面に調整加工が施され、刃部を中心としてその両面が丁寧に研磨された資料で、平面形が狭長の楕円形を呈し横断面がレンズ状の神子柴段階には通有な石斧形態と評価される。同一ブロック内から出土したこれら石器群の相伴関係を疑う余地はない。看過できない点はそれらの石器群に両面加工石器が複数点伴出している事実であり、特に珪質頁岩製資料は通常の石槍のように左右対称形を呈さず、調整加工に部位的な偏在性が顕著(図4.1・2)であることから、恐らくこれらは神子柴系の石槍と捉えるよりも寧ろ細石刃核原形と理解すべきと考えている。

## 2-4 樽口遺跡

新潟県北部の朝日村に所在する遺跡で、奥三面ダム建設に伴い1992年から2カ年の発掘調査が実施された。遺跡は三面川と末沢川とが合流する河岸段丘上に位置しており、ナイフ形石器群を始めとした複数の旧石器時代文化層の存在が確認された。細石器群は平面分布と組成からA-MH文化層とA-MS文化層とに二区分され、前者はホロカ型細石刃核を中心とした石器群、後者は湧別技法白滝型を中心に組成する石器群として、互いが時間差を有するものとして報告されている(新潟県朝日村教育委員会1996)。

A-MH文化層からは細石刃核3点、細石刃118点、彫器2点、搔器21点、彫搔器7点を含む204点が出土し、そのうち石材は珪質頁岩が198点と圧倒的多数を占め、他の6点は玉髓製である。一方のA-MS文化層からは細石刃核16点、細石刃1,220点、細石刃核原形13点、スポール102点、彫器1点、搔器19点、尖頭器8点含む5,484点の石器群が検出された。用いられた石材は黒曜石が1,671点と圧倒的多数を占めており、次いで無斑晶安山岩98点、珪質頁岩22点という内訳を示す。報告者によって二つの石器群が区別されているが、両者の分布の違いは殆ど認められずに併行関係にあると見做せるものであるが、とりあえず本論では両者について概観することから始めてみよう(図5・6参照)。

A-MH文化層から出土した細石刃核はいずれも珪質頁

岩製のホロカ型である。厚手の大型剥片の主要剥離面を打面とし、その全周に及ぶ石核調整をおこなって船形の形態が作出されている。他2点は接合資料であり、その表皮に自然面を大きく残存させた大型で厚手(3~4cm)の剥片を、ほぼ中央で側辺部から横方向に加撃して二つに分断している。その分断面を打面として僅かな石核調整をおこなって細石刃核を作り出している(図6.2)。

A-MS文化層から出土した黒曜石製の細石刃核16点は白滝型とされつつも、極めて多様な技術的特徴を備えた一群であると言えよう。図5を参照しつつ順次、代表的資料を取り上げて検討してみることとしよう。まず、細石刃核原形として両面に入念な調整加工の施された典型的な白滝型の一群がある(図5.13・16)。出土資料のなかには両面体から作出された削片類も散見されることから、遺跡内へと両面加工の細石刃核原形が持ち込まれていた点は間違いないであろう。また同様に両面加工体でありながらも素材となった厚手大型剥片の形状を留めた接合資料(図5.17)も存在し、両面加工体の形成がどのような製作工程を踏まえたものであったのかを伺い知ることが可能である。図5.9の資料は小ぶりながらも、両面加工の細石刃核原形として遺跡内へ持ち込まれた状態を示す良好な資料と言えようか。

厚手剥片を素材として周辺部に部分的な調整加工を施し、その後側辺部側に相当する小口方向から加撃することで打面部を作出した一群が見られる(図6.2・3・7)。この一群には側縁調整などを殆ど行わない例(図6.5・10)と、打面を作出後に石核調整を行なっている例(図6.1・6)も含まれるが、両者を明確に区分できない点は図6.15・20の接合資料が明示するところでもある。

ここ樽口遺跡で特徴的な資料が大型剥片を側辺部側の小口箇所より加撃して打面を作出、そこから比較的入念な石核調整をおこなっている一群の細石刃核群である。削片の作出は一回に留まらず、複数回に及んでいる例が多く図5.14・18などがこれに相当するが、図5.18では接合資料からだけでも8回にも及ぶ削片作出を確認することができる。図5.14では削片の作出によって更新された平坦な打面から丁寧に石核側面の調整が施されており、こうした削片作出と石核調整が連動するように交互に組み合わさった特徴的な製作工程の存在が浮かび上がって

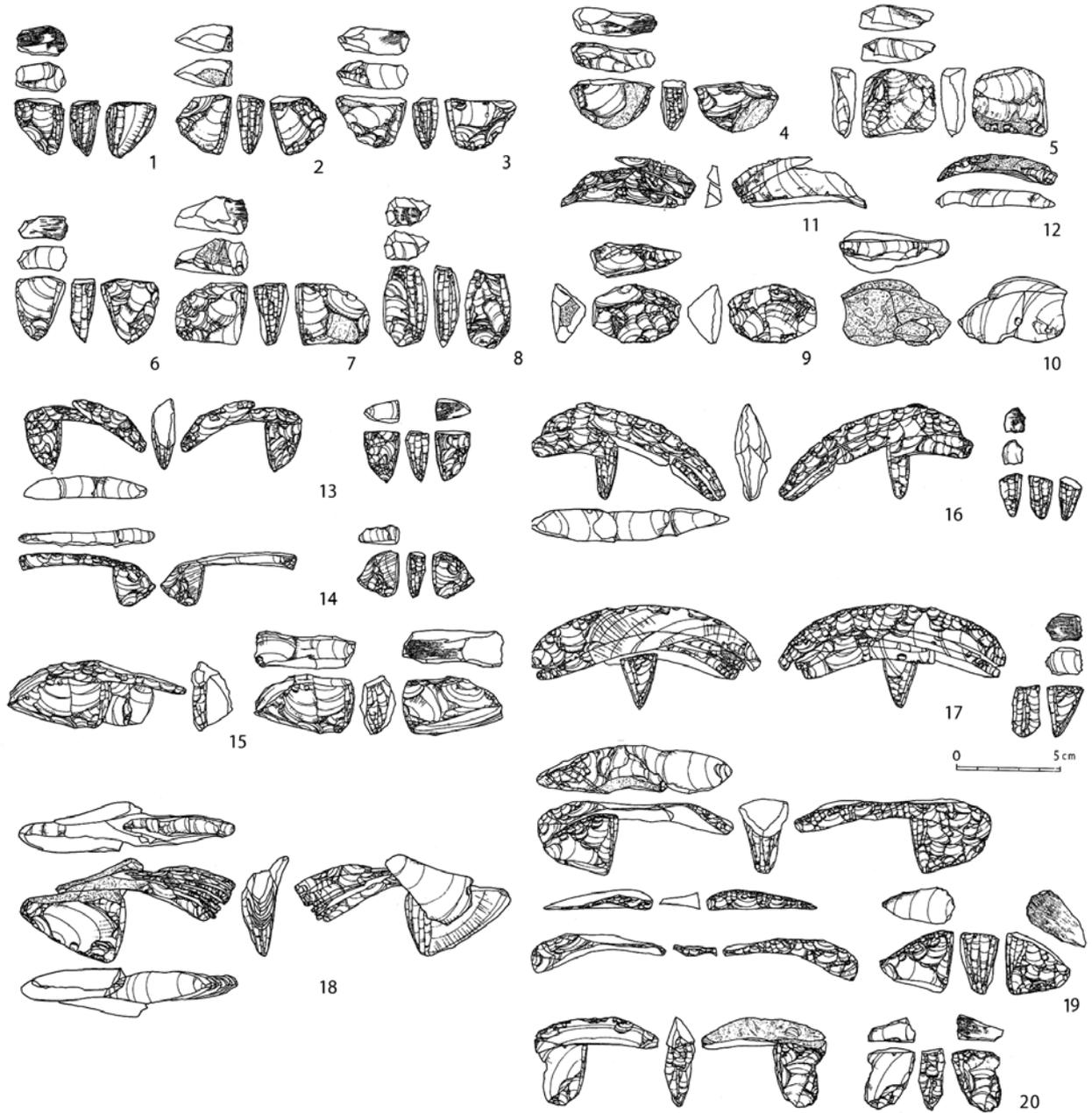


図5 樽口遺跡の細石刃核資料 (A-MS層)

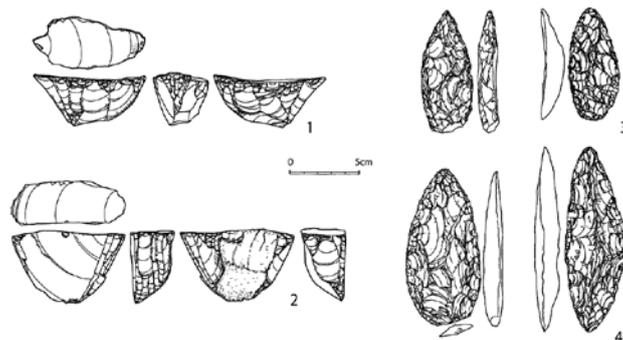


図6 樽口遺跡 A-MH層細石刃核とA-MS層石槍

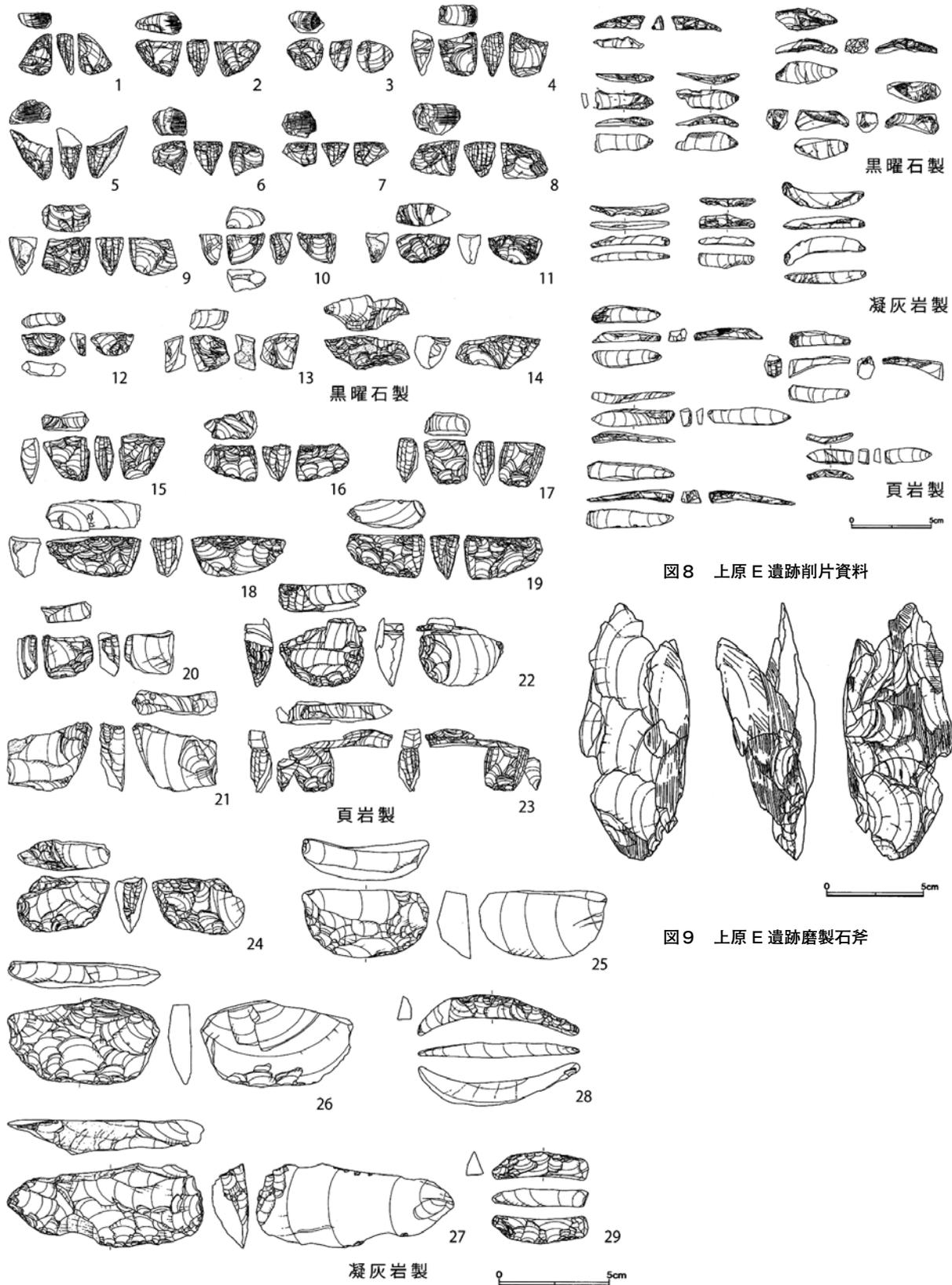


図7 上原 E 遺跡出土石刃核群他

図8 上原 E 遺跡削片資料

図9 上原 E 遺跡磨製石斧

くる。またこれら以外にも、厚手黒曜石製剥片を用いたホロカ型細石刃核などの存在も見逃ごせない。

樽口遺跡の資料群が語るものは、湧別技法による細石刃核の製作が模式図などからイメージされるように、石核原形の用意から複数回の削片作出などの製作工程を整然と規格的に踏まえて製作されてはならず、極めて流動的でしかも工程的变化に富んだ技術構造を持って運用されていたという事実にある。具体的には湧別技法或いは白滝型とされつつも細石刃核の原形として両面体原形が用意されている場合は少なく、厚手剥片を側片部側（小口方向）から加撃することで打面を作出し、その打面からの石核調整を経て楔形の石核作業面形態を作り出した例が大半を占めている。削片作出と連動するように石核側面を中心とした調整加工を繰り返すことで、結果的に細石刃核は湧別技法を連想させる技術工程を踏まえた概観を備えるに至っている。

いずれにしてもこうした良好な接合資料に恵まれた樽口遺跡資料からは、当初より用意された両面加工体から順次、断面三角形のファーストスポール、そして断面四角形のセカンドスポールというように、削片を規則的に剥離してゆく典型的な技術工程を復元することは困難で、削片作出と石核調整とが一体的に技術工程に組み込まれていた様相が確認できるのである<sup>2)</sup>。

## 2-5 上原E遺跡

新潟県の南部に位置する津南町に所在する細石器段階の遺跡で、信濃川の支流である中津川が作り出した右岸高位段丘上に位置する。遺跡からは隣接した大小2か所の石器集中箇所が発見され、層位や石材、石器組成などから石器群は同一時期に残されたものとの判断が下されている（新潟県中魚沼郡津南町教育委員会2018）。

石器総点数の44%を占める4,000点近くの資料群が黒曜石によって占められ、硬質頁岩は2,400点余りで38%、これに凝灰岩や安山岩などの石材利用が続く。細石刃核群を例に石材別に見るならば黒曜石（16点）、硬質頁岩（9点）、凝灰岩（5点）、鉄石英（1点）という構成を読み取ることができ、特にこの地域に於いては非在地系石材と認識される黒曜石製品が多数を占めるやや特異な様相を指摘することができようか。加えて本遺跡

では黒曜石・硬質頁岩などのように、系統が異なる石材を用いた細石刃核群が同一の石器分布を構成している点も重要な特徴とすることができる。

細石刃核の素材については厚手剥片を分割した事例（図7.1～5）が主体であるように感じるが、寧ろ分割礫を用いたと考えられる資料（図7.6～8）も認められる点は注視すべきであろう。細石刃核原形も含めて残された自然面に注目してみると、その側面（図7.5・14）よりも背面（図7.6～11・13）に残置した例が圧倒的に多いことに気づく。この点は同じく黒曜石原産地から離れて形成された樽口遺跡との素材形態やその使い方（設定方法）の相違が気になるところである。厚手の剥片か礫分割を素材として用いたかの判断は容易ではないものの、いずれにしても素材剥片の表裏面を石核側（腹）面に設定した後、小口方向からの削片作出を技術工程に取り込んだ、樽口遺跡で優勢であった資料群が稀少なことは注意しておく必要がある。

細石刃核を見ると「白滝型」を連想させるような両面加工体を準備して削片を作出した工程を留めた資料は見当たらないものの、黒曜石製削片の中には両面加工体の存在を伺わせる資料が確実に存在する。比較的入念な石核調整（下縁）が認められる資料（図7.2・11）についても、剥離面構成からその手順を確認すると、それは打面作出後のものであって原形段階の状態を保持したものではないことが分かる。図7.1・2のような典型的な楔形細石刃核に関しても、その実態は湧別技法の製作工程を踏まえていない可能性もある。その一方で黒曜石製の細石刃核群のなかで主体となるのは、図7.6～8のような厚手剥片・分割礫等を素材として用いたうえで、打面形成（剥片素材の場合も小口方向とは限らず、図7.5・9では腹面方向）を先行させ、続いて形成されたその平坦な打面を用いて石核側面調整を進めてゆく技術工程を踏まえた一群と認識される。そしてこのような素材形態や打面作出方法並びに石核調整などの製作工程や石核形態を超え、これら黒曜石製細石刃核群がほぼ一様に打面部への擦痕が施されている点は極めて重要と言えよう。

上原E遺跡の注目すべき点はこうした多様な特徴を持つ黒曜石製細石刃核群と共に、在地系石材とされる凝灰岩製、硬質頁岩製の細石刃核の共伴関係が同一ブロック

内で確認されたことにある。凝灰岩製の細石刃核は4点存在しており、いずれも厚手大型剥片を素材としていることが石核側面に残置された主要剥離面から明らかである。石核調整は基本的に片面に留まる特徴が看取され(図7.25~27)、特に下縁部に於いて顕著な調整加工が観察される傾向がある。打面形成が素材作出時の打点側に偏る印象を与えているが、いずれにしてもこのような片面に偏った石核調整は、素材主要剥離面と共に対となって対称的な石核側面の形成を意図している点は間違いあるまい。剥片小口方向からの削片作出後に石核調整を行なっている例(図7.24・26)や、当初より両面加工の原形の存在を肯定する資料(図7.29)も少数ながら認められ、石材による独自の加工と共に湧別技法の影響についても否定はできない。

硬質頁岩製の細石刃核群はどうであろうか。硬質頁岩製細石刃核群を概観するならば2つの形態群に区分でき、一つは図7.15・17の細石刃核に見られるように原形として両面加工体の素材が用意され、長軸方向への加撃を経るなかで削片作出がされている資料群であり、削片作出後にその打面からの石核調整は殆ど認められていない。図7.23の接合資料を見る限りでも両面体に仕上げられた石核原形の存在は確かであろう。先に観察した凝灰岩製と同様に石核調整が片面へと偏在した資料もある(図7.22)。いずれにしても素材剥片の用い方や削片作出方法の様相などからも湧別技法による細石刃核群として把握できるものであろう。なお図7.17の資料は細石刃の剥離作業が前後双方の小口方向から行なわれた痕跡を留めており、図7.15も類似した双面での細石刃剥離作業を意図したものかも知れない。

もう一つの細石刃核が図7.18・19のように大型剥片或いは礫分割の際の平坦な剥離面を打面として丁寧な石核側面調整が施されたホロカ型の一群で、側面観は船形で正面観は楔型を呈する典型的な形態と言えようか。図7.16の資料についてもこれらに類する資料と捉えることができようか。打面に残る剥離面からはこれらの石核素材が大型の厚手剥片であったこと、素材主要剥離面からの石核調整が入念に行なわれ下縁調整も相俟って整然とした船形の形態が形成されたことが確認できる。

上原E遺跡の細石刃核群の特徴については後述するこ

ととなるが、重要なことは黒曜石・頁岩・凝灰岩など石材を異にする細石刃核群が同一の石器集中を構成している点で、同一期の細石刃核構成の多様な姿が極めて明瞭に抽出されたことにある。打面に擦痕が施された「白滝型」の型式学特徴や技術的特質に加えて、石材を異にした細石刃核構成の姿がこれまでにない明確に提示されることとなった。しかし、石材差による構成比の違いはあるものの、厚手剥片を素材として周辺調整を通じて両面体の石核原形を用意し、長軸(小口)方向から削片を作出して打面を形成する一群が確実に存在する。またそこには素材形態にあまり手を加えることなく利用する小口方向から加撃して削片を剥離する事例も含まれているが、いずれも削片を剥離した後に行われる側面部への石核調整の出現率はたかい。

頁岩製だけでなく黒曜石製の細石刃核のなかにも、素材の主要剥離面側から入念な石核調整を施すホロカ型の一群が存在する。こうした事例は樽口遺跡などでは見出し難いものの、湯ノ花遺跡の資料に酷似すると解することができよう。重要な点は形態差を超えて本資料群でもその打面に明瞭な擦痕を留めていることにある。上原E遺跡の石材環境の詳細は不明であろうが、凝灰岩と頁岩は遺跡周辺での確保が可能である一方で、黒曜石は遠隔地からもたらされた非在地系石材である点是指摘するまでもない。このような石材環境も細石刃核の構成を考える場合に重要な視点となるであろう。

なお、上原E遺跡ではこれらの細石刃石器群と共に石槍、そして磨製石斧に関連した多くの調整剥片とその接合資料が得られている(図9)。

## 2-6 大刈野遺跡

大刈野遺跡は新潟県の湯沢町に所在する遺跡で、信濃川支流の魚野川の左岸河岸段丘上に位置している。遺跡からは数次回にわたる発掘調査を経て旧石器時代終末から縄文時代初頭の遺物が14箇所のブロックから検出されている。各ブロック間の関係性については不明であるが、「第1・4・12・14ブロックから細石刃石器群が出土……周囲に尖頭器を含む第2・3・7号ブロックが散在する」とされている(佐藤2020)。ブロック群のなかでも12号ブロックからは黒曜石製細石刃核とその素材石核、頁岩

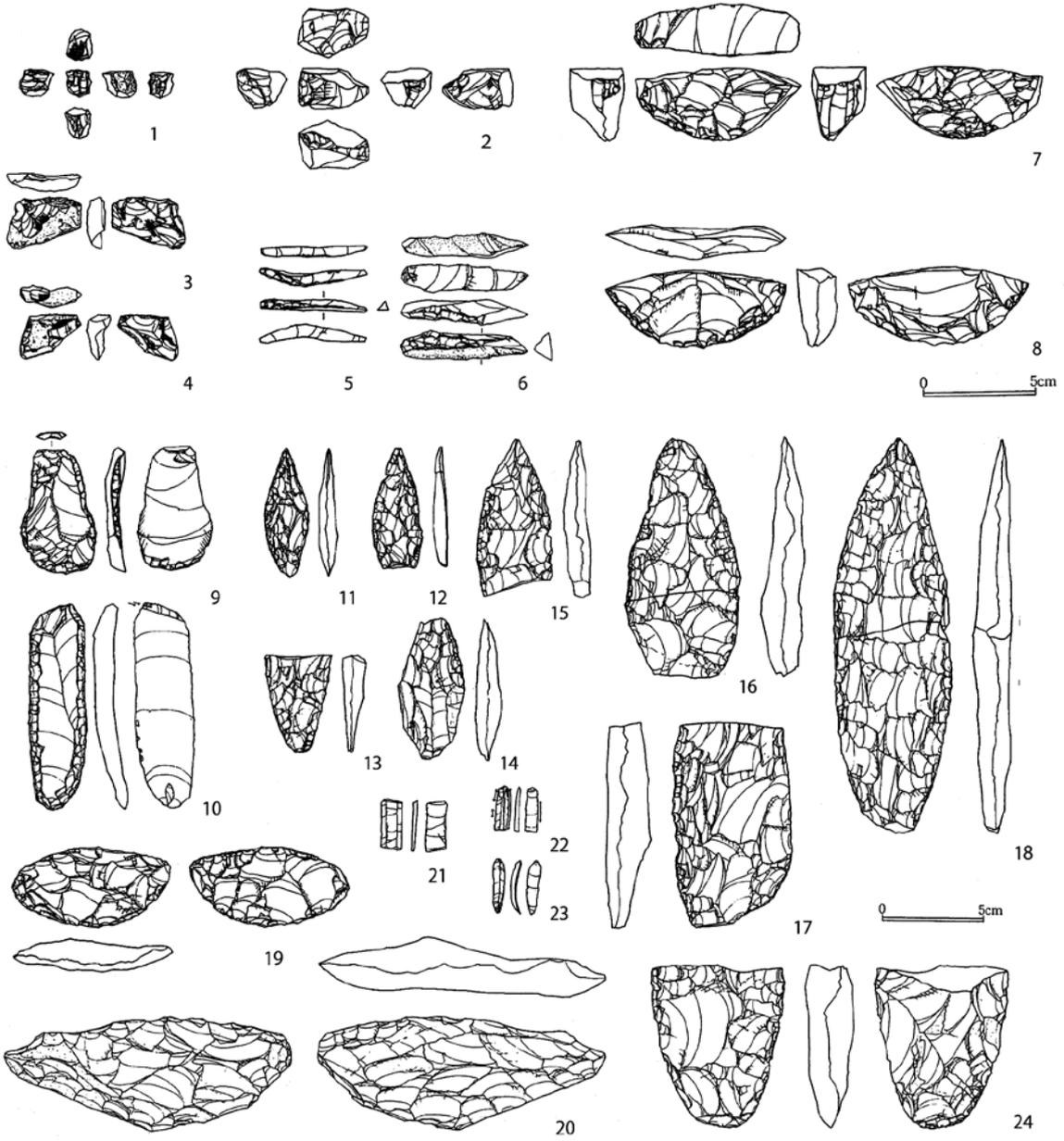


图10 大刈野遺跡出土資料

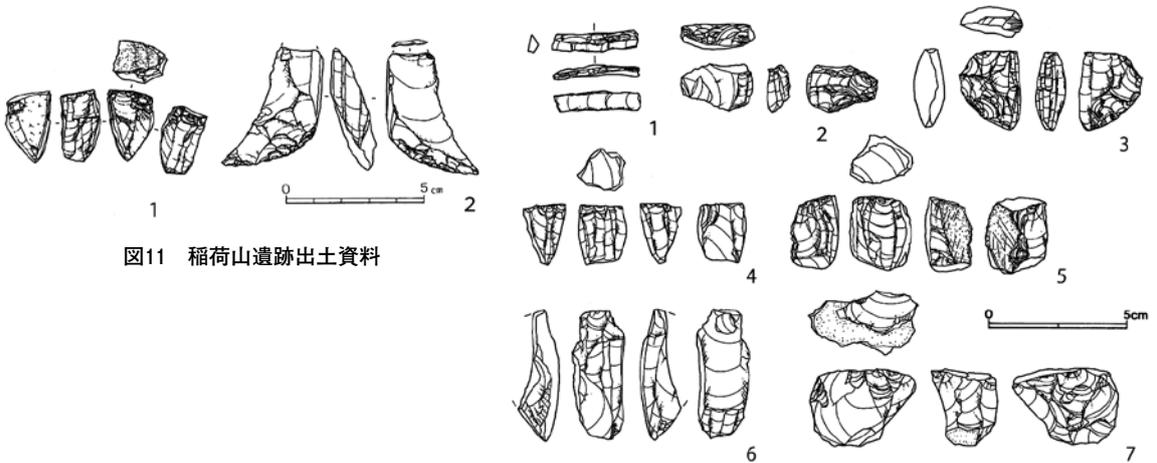


图11 稻荷山遺跡出土資料

图12 宮ノ前遺跡出土資料

製の細石刃核とその原形が出土している。細石刃は複数のブロックに点在するようであるが、石核を伴っているのは本ブロックのみである。また石槍群も複数ブロックで出土しているが、安定して見られるのは2・3号ブロックだけで、3号では石斧の伴出も確認することができるものの、細石器群と石槍群との関係はやや不鮮明と言わざるを得ない。

12号ブロックから出土した黒曜石製細石刃核のなかにはその打面に擦痕を持つ、「白滝型」とされた資料が含まれている(図10.1)。この資料については「原面を残す素材から製作され……作業面の長さは14mm、幅は約10mmを計測する」(湯沢町教育委員会2018)と説明されているとおりで、小型のサイコロ状に近似した石核右側面には自然面が残されており、対する左側面は打面からの石核調整面で構成されている。擦痕を持つ打面は小型礫の分割時のものと推察され、下縁調整等は一切認めることができない。もう1点の黒曜石製石核はサイコロ状を呈する多面体の資料で、右側面に細石刃剥離痕の存在が指摘されているが、同様な剥離は下面にも見られることから或いは石核調整に伴う痕跡であるのかも知れない。本ブロックにはこの小型細石刃核と共に背面並びに片側面に平坦な自然面を残す2点の黒曜石製の板状石核が出土しているが、その形態や法量を加味する限りこれ等は細石刃核の素材として持ち込まれた蓋然性がたかい。

頁岩製の資料としては細石刃核(図10.7)とその原形(図10.8)、及び削片(図10.5・6)である。細石刃核は両端面に細石刃剥離作業面を持つ例で、打面形成に伴う削片剥離は対向した小口からの加撃に伴うものである。石核は原形と同様、両面加工体が用意された後に削片作出を経て打面形成が果たされたものと考えられるが、削片からは複数回の原形を断ち割ったような痕跡を見出すことはできない。図10.8の細石刃核原形は打面形成済みの例であるが、それは腹面方向から折り取るようなものであったらしい。石槍群として分類されている資料中に対称形を呈さない半月形の一群(図10.19・20)が見受けられるが、器体がやや厚いことや直線的な片側辺の状態などから、或いは細石刃核原形の可能性を考慮すべきかも知れない。

大刈野遺跡で出土している石器群の共伴関係について

は予断を許さないものの、少なくとも12号ブロックに於ける組成と共伴関係については疑問を挟む余地はない。特に頁岩製の湧別技法関連資料と共に礫分割素材を用い、分割面からの石核調整を経て後の打面部への擦痕と細石刃の剥離を行なっている「白滝型」の共伴は重要と言えるであろう。石核素材と考えられる黒曜石製の板状石核の伴出も興味深い。

## 2-7 稲荷山遺跡

群馬県の赤城山南麓に残された西鹿田丘陵部に所在する稲荷山遺跡は縄文時代前期の集落跡で、試掘調査での出土品である細石刃関連資料は2点が報告されている(若月1980)。1点は打面に擦痕の施された削片系とされた細石刃核(図11.1)であり、細石刃の剥離作業は背面側からの展開も確認できる双面のそれである。石核の法量は「長さ2.6cm、幅1.7cm、厚さ1.4cm、重量は7.0g」(小菅1994)。削片作出に伴う打面形成は石核小口方向からの加撃によっているが、石核側面部への調整がその後の製作工程に組み込まれていて、細石刃核原形が両面体であった可能性は低いと判断される。恐らく厚手の剥片を小口方向から分断するようにして打面を作出し、そこから石核調整が進められたものであろう。石核側面(図11.1左)については不鮮明であるが自然面と考えられ、本資料もその素材が厚さ2cmに満たない黒曜石製剥片であったと推定される。なお、この黒曜石は長野県麦草峠産との分析結果が報告されている(建石ほか2012)。

頁岩製のものは石核側面を留めた作業面剥離資料である。下縁部に入念な調整加工が施されたことが観察でき、湧別技法による頁岩製細石刃核の存在を示唆しよう。

## 2-8 宮ノ前遺跡

岐阜県最北部の飛騨市に位置しており、神通川の左岸段丘上に残された遺跡からは旧石器時代から縄文時代の遺物が出土している。草創期以前の細石器文化資料は二つの地層から出土したことが報告書で指摘されている。即ち「隆起線文土器包含層と細石刃核包含層の間に分層可能な青灰色シルト層が確認され……隆起線文とは異なる土器片をはじめ、先刃搔器や円形搔器・尖頭器……削片系の細石刃関連資料が包含されている」(宮

川村教育委員会1998)との説明であり、それぞれの地層は第15層、16層、17層と区分されている。

17層出土の細石刃核(図12.4・5)は「黒曜石製の角柱状」と報告されている資料である。この上位層である16層からは黒曜石製の細石刃核(図12.2・3)と削片(図12.1)、そして下呂石製の作業面更新の剥片(図12.6)とチャート製の細石刃核原形(図12.7)が出土している。図12.1の黒曜石製の削片は側面に残る剥離面を観察する限り両面体から作出された可能性がたかく、図12.3の細石刃核と共に素材時の原形の姿を彷彿とさせている。ただし、図12.3の細石刃核の両側面に観察される側面調整は擦痕を残す打面からの加撃であり、本例では石核側面の調整工程が打面作出後に行なわれていたことを明示している。興味深い資料が図12.2の細石刃核であり、石核素材は厚さ1cm程の黒曜石製の幅広剥片であったと推察され、その周縁部に主要剥離面側から急峻な調整加工が施されている。丁度それは片面加工体としての体裁を持ったもので、素材端部側の小口方向から加撃することで打面を形成しているが、この剥離面は原形長軸の末端にまで及ばずに中途に留まっている。素材剥片が薄く小型であることから細石刃作業面の幅は約1cmでその長さは1.5cm程、恐らくここから生み出される細石刃は極めて小型であったに違いない。

図12.6の下呂石製の剥片は両面加工体の湧別技法による細石刃核の存在を暗示するものであり、チャート製の原形はその打面側と底面側に湾曲した自然面を残していることから円礫を素材として分割、礫面を除去した剥離面を打面に石核調整を進めた状況を読み取ることができようか。この原形がどのような細石刃核の生成にかかわったのかは不明で、石材は異なるもの図12.3・4のような形態へと変異する可能性も否定できないのである。

ここ宮ノ前遺跡の16層からはこれらの細石刃石器群と共に大型の石槍群と石斧、円形搔器や石刃素材の先刃搔器や彫器なども出土しているが、分布論的な組成検証はなされていない。組成や相伴関係についての確証はないものの報告書では両石器群が同一層内から出土し、上層である15層から出土している隆起線文土器に伴う石器群との違いからその共存については肯定的に捉えている。

### 3. 「白滝型」の実態

これまでの検討を通じて、本州地域で報告されている「白滝型」細石刃核群の様相が明らかになったのではないかと考える。細石器文化期の研究に於いては主要石器である細石刃核の型式認定と石核構成が最も重要な対象であることは改めて説明するまでもなく、細石刃核の素材形態から石核原形や調整加工、打面作出の加撃方向やそのタイミングなど様々な技術要素の工程的連鎖を分析・検討することが不可欠である。研究対象となる細石刃核にはそのような様々な技術的な痕跡を留めているのが通例であることから、勢い細石刃核の分類は詳細を究める傾向があると言えようか。

しかしながら、そうした中であって当該「白滝型」については、その石核打面に擦痕を有することを殆ど唯一の基準として認定されてきたように感じる<sup>3)</sup>。1970年代の初期に越中山E遺跡や湯ノ花遺跡、1990年代では樽口遺跡、宮ノ前遺跡、そして2010年代に上原E遺跡というように遺跡数自体は決して多くはないが、打面に擦痕を持つ細石刃核の存在が本州地域でも確実となった。山形県下での擦痕打面を持つ細石刃核群の観察を通じて、加藤氏は北海道地域に存在する本来の「白滝型」との相違点を認めつつも、技術的関連性については肯定的に捉えていたことが分かる(加藤1992)。樽口遺跡と上原E遺跡の調査によって当該細石刃核の様相は明確となった感があるが、その基本的特徴は表採資料ながら山形県下の湯ノ花遺跡・越中山E遺跡の資料に収斂されていると言っても過言ではない。それぞれを仮にⅠ類からⅢ類に分けてその特徴を捉え直しておこう。

Ⅰ類・・・湯ノ花遺跡(図2.1)の資料で、厚形の剥片を素材とするが削片作出前の原形段階に面的な石核調整が行なわれている。本例での石核調整は片面であるが基本的な可搬形態としては両面加工体であったと考えられる。削片作出後に打面からの石核調整が殆ど見られないものをⅠa類、顕著なものをⅠb類としておく。Ⅱ類・・・越中山E遺跡の資料を典型とする。Ⅰ類とは相違して石核調整に先行して打面形成が進められている。やや厚手の素材剥片を側辺(小口)方向から加撃

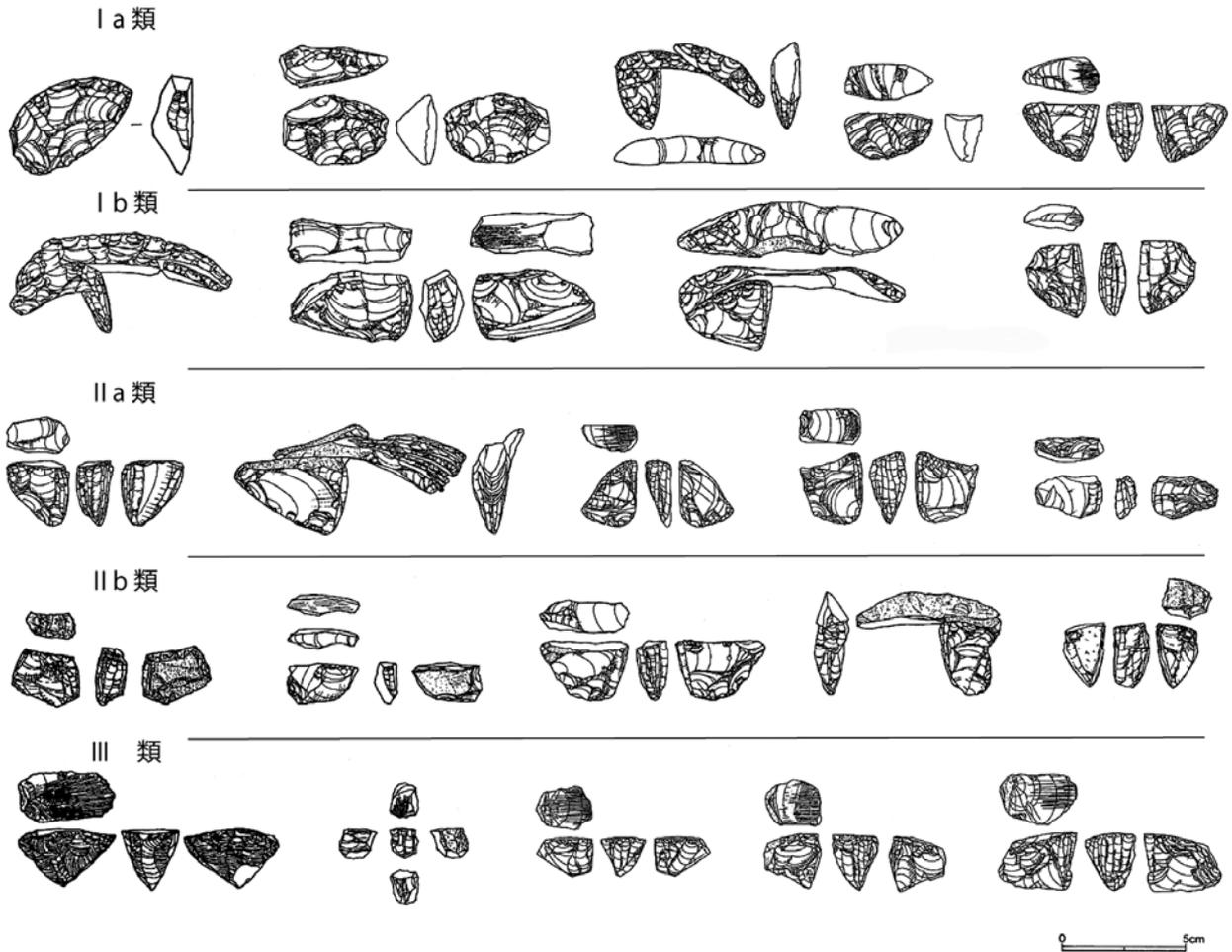


図13 「白滝型」の類型区分

して平坦な打面を作出，そこから石核側面部の調整を行なう。削片の作出後の石核調整が入念であり，繰り返して削片作出と石核形態を整える例（II a類）と，僅かな側面調整や部分的な背縁・下縁部に留まる例（II b類）と区分しておく。

III類・・・湯ノ花遺跡（図2.2）の資料を典型とする。石核素材は厚手の剥片か分割礫やそれに伴う剥片で，主要剥離面を細石刃核の打面としてここから石核側面調整が丁寧に進められている。側面形態は船形で正面観は楔形に仕上げられている場合が多い。

これまで「白滝型」と呼称されてきた一群の細石刃核には，少なくともこうした複数の特徴を備えた資料が含まれている事実は直視しなくてはならない。とりあえず前章で紹介した黒曜石製の細石刃核資料がどのように区分可能か概観してみよう（図13参照：類別区分が曖昧な資料についての判断は保留）。

○I a類・・・樽口遺跡（図5.13・16・9），上原E遺跡（図7.2・11）

I b類・・・樽口遺跡（図5.2・15・17・19），宮ノ前遺跡（図7.3）

○II a類・・・樽口遺跡（図5.1・6・14・18），上原E遺跡（図7.1・4・5），宮ノ前遺跡（図12.2）

II b類・・・葉菜山 No.34遺跡（図3），樽口遺跡（図3～5・7・10・20），上原E遺跡（図7.12・13），稻荷山遺跡（図11.1）

○III類・・・上原E遺跡（図7.6～8・10・14），大刈野遺跡（図10.1）

なお参考までに，黒曜石以外の頁岩・凝灰岩などを用いた細石刃核は以下のとおりの分類が可能となろう。

○I a類・・・湯ノ花遺跡（図2.5），上原E遺跡（図7.15・17・22・23），大刈野遺跡（図10.7・8）

I b類・・・上原遺跡（図7.16・24）

○Ⅱa類…上原E遺跡(図7.26)

Ⅱb類…上原E遺跡(図7.20・21)

○Ⅲ類…樽口遺跡(図6.2), 上原E遺跡(図7.18・19)

黒曜石製の打面部に擦痕を持つ「白滝型」と認定されてきた細石刃核群が、如何に多様な形態を持つものであるのか浮き彫りになると同時に、白滝型としてイメージされる両面加工の原形やその断ち割りという一連の技術工程を踏まえた典型例としては、殆ど唯一、樽口遺跡のNo.16の資料が該当するに過ぎない。ただしその資料も削片剥離後に形成された打面部から石核側面への調整を確認できる例であり、厳密な意味での白滝型と呼べる資料とは言い難い。恐らく従前の厳密な規定から判断するならば、本州地域に真性の白滝型の存在を認めることはできなくなってしまう。そのような意味も含めて、北海道地域の白滝型の型式学的範疇の見直しは急務な課題であると言えようか<sup>4)</sup>。

Ⅱ類の存在は注視されて良いであろう。厚手の剥片を中心に素材の表裏面が細石刃核の側面となるよう使い、側面に相当した小口方向からの加撃によって細石刃核の打面作出を遂げている。石核整形に先立つ打面形成の背景・要因として考えられることは、剥片を素材として小口方向から分断するように打面作出することで、その表裏剥離面が細石刃核の左右側面として転用可能となる点に集約されようか。素材剥片に残った礫面・稜線部などは削片作出後の打面部からの石核調整で除去し、これで正面観が楔形の細石刃核原形を効率的に用意することができたに違いない。樽口遺跡の接合資料(図5.18・20)からその製作工程をなぞってみると、そのような素材と技術、石器形態との相関的関係性を容易に肯首することができるであろう。素材形態の状態如何では樽口遺跡図5.5或いは図5.10、葉山遺跡例のように打面形成後に於いても、殆ど石核調整を施していない例が存在する事実も見落せない。注視すべき点はこのような素材とその利用形態、厚手剥片を細石刃核素材として用いること、打面作出を素材剥片の側面(小口)部への加撃によって遂げている点は、少なくとも関東・中部のみならず本州地域の伝統的細石刃核製作では見出し難い点と理解して良いであろう。同じⅡ類でも樽口遺跡と上原E遺跡のものとはやや異質な印象を与えているが、これは原産地

から遠ざかるに従って進行したであろう石核調整の程度を反映している蓋然性がたかい<sup>5)</sup>。

第Ⅲ類については厚手剥片や分割礫などを素材に、その主要剥離面等を石核打面として石核調整をおこなっており、新たな断面作出という技術工程を介在させていない点に特徴がある。完成された石核形態の側面観が船形で正面(作業面)が楔形を呈する本類は、寧ろホロカ型の範疇で捉えるべき資料である点は改めて説明するまでもない。湯ノ花遺跡と大刈野遺跡で各1点、そして上原E遺跡では幾つかのまとまった資料群を確認することができた点は注視されて良いだろう。

#### 4. 編年的位置と派生する問題

以上、本州地域での出土が報告されている8遺跡の「白滝型」細石刃核について検討を加えてきた。従来から指摘されてきていたとおり(加藤1992)、或いは近年の検討で述べられているとおり(栗島2010; 佐久間2015)、細石刃核打面に明瞭な擦痕を留めるという共通性に貫かれながらも、その素材や調整加工や製作工程、石核形態などでの振れ幅は大きく、「白滝型」と捉えられつつも模式図からイメージされる細石刃核型式とはかけ離れた型式実態をそこに認めざる得ないのである。そもそも北海道地域に於ける白滝型についても、白滝服部台には主体となるⅠa類と共にⅡb類の白滝型細石刃核が報告されているし(杉原・戸沢1975)、元町2遺跡などでもⅡa・b類と共にⅢ類として区分できる白滝型の存在を確認できる(日本考古学協会1999)。北海道地域での様相を念頭に置く限り、本論で確認された多様とも言える本州地域での「白滝型」の様相が決して特異・異質なものではなく、系統的関係性の基に評価可能との印象も抱かせているのである。本質的な論点と評すべきなのは白滝型の技術形態学的な再検討であることは言うまでもなく、打面部への擦痕は無論のこと、素材やその設定方法や技術工程の連鎖、特に打面作出と石核調整との関係性等を有機的に捉えたうえで、改めて「白滝型」として分類可能な型式学的特徴を石核群に認め得るのか否か、検討することが急務であろう。忘れてならない重要な視点

としてはその際に白滝型の生成、とりわけ擦痕打面と石材環境との関与性を視野に入れておくべきことであると考えている。

さて、本州地域の「白滝型」細石刃核群として本論では素材形態、素材の用い方と打面作出方法、石核調整の工程的位置などに準拠し、Ⅰ～Ⅲ類に大別したところである。樽口遺跡や上原E遺跡では資料的な充実・安定性からいずれの石核形態も確認できたが、他の遺跡ではほぼ単独出土であった。今後の資料蓄積を待って判断せざるを得ないものの、現状に於いては上記した遺跡群での編年的前後関係は成立しないものと考えておきたい。ほぼ典型的な「白滝型」の細石刃核に近いⅠ類にしても、純粋に石槍状の両面加工体を細石刃核原形として用意されていた状況は不鮮明であると判断せざるを得ず、素材面を大きく残存させた資料や、削片の作出に連動するように石核調整が施される事例が圧倒的であることは改めて説明するまでもなく、そのような技術的傾向はⅡ類に於いても顕著に見出されたところでもあった。勢い「白滝型」の大きな特徴として指摘されてきた削片作出の意義、石核原形の断ち割りと石核の形状修正（安蒜1979）に関しては否定的とならざるを得ず、削片の作出は石核調整用の打面形成に寧ろその機能的意義が置かれていた点が指摘出来そうである。

意外にも感じる剥片素材とした「白滝型」細石刃核群の多様性は、湧別技法やホロカ技法など系統的・空間的な他型式との関係性や関与（複合）性を視野に入れて検討を進めなくてはならないが、その論点での再検討は別の機会に譲ることとおきたい。ここではこうした「白滝型」細石刃核を巡る編年的な位置について触れるに留めておくこととしよう<sup>6)</sup>。

本州地域で確認されている「白滝型」細石刃核の出土地が脊梁山脈を挟んだ日本海側を中心として分布している点は注視される。葉菜山 No.34遺跡と稲荷山遺跡は脊梁山脈を越えた地点であることで共通しており、こうした空間的な偏在性からは併行関係にある石器群が必ずや存在した筈である。ではどのような石器群が該当するのであろうか。次に石器組成と細石刃核自体の型式学的な特質、二つの観点からこの問題に対する研究の見通しについて触れておきたい。

「白滝型」細石刃核群を含む石器群組成の特徴は、湧別技法による削片系細石刃石器群に特徴的な荒屋型彫器・角二山型搔器を殆ど組成していないという事実であろう。樽口遺跡では A-MS 文化層と A-MH 文化層とでは様相を違えており、前者で出土している僅か1点の彫器は荒屋型だが、後者では多数の彫器が出土しているが荒屋型は見られない。二つの文化層では安定した搔器類の出土が確認されているが角二山型は報告されていない。一方の上原E遺跡では彫器・搔器共に石器組成内での安定的位置を占めてはいるものの、そこに荒屋型・角二山型の標識的な型式は含まれていない。こうした石器組成に見る様相は、樽口遺跡・上原E遺跡がそれぞれ角二山遺跡・越中山遺跡S地点、荒屋遺跡、正面中島遺跡などの空間的位置や状況を考慮するならば、遺跡差としてではなくて時間的な後出性を物語っていると捉えることに妥当性であろう。加えて両遺跡では神子柴系とされる石槍群が少数ながらも相伴しており、上原E遺跡では磨製石斧の伴出についても疑いを挟む余地がない。そうした蓋然性については近年、葉菜山遺跡 No.34遺跡での成果を受けてより明確となったと認識されるであろう。

細石刃核それ自体での比較研究からはどのような指摘が可能であろうか。前章にて既出資料の検討を重ねるなかで、「白滝型」として報告されている資料中に石核原形や製作工程等で真性を満たしたものは殆ど見出し出せない事実が確認された。両面体の石核素材よりは厚手剥片を小口方向から加撃して打面を作出し、或いは素材剥離面を石核打面へと転用し、そこから石核形態の整形・修正を図った資料群が安定して見出せた点は確証済である。看過できない点は、こうした細石刃核製作にかかわる技術的特徴が黒曜石製のものだけでなく、在地色の強い頁岩・凝灰岩などを用いた細石刃核にも認められることが上原E遺跡の資料検討からも明らかとされていることにある。

こうした細石刃核群は、東北から中部北部域に分布する湧別技法関連の資料群には不鮮明であり、また関東地方に貫的に見られる頁岩製の湧別技法関連石器群でも殆ど見出すことのできない特徴であり、そのような諸点からも一連の「白滝型」細石刃石器群の後出性が肯首されると判断している。

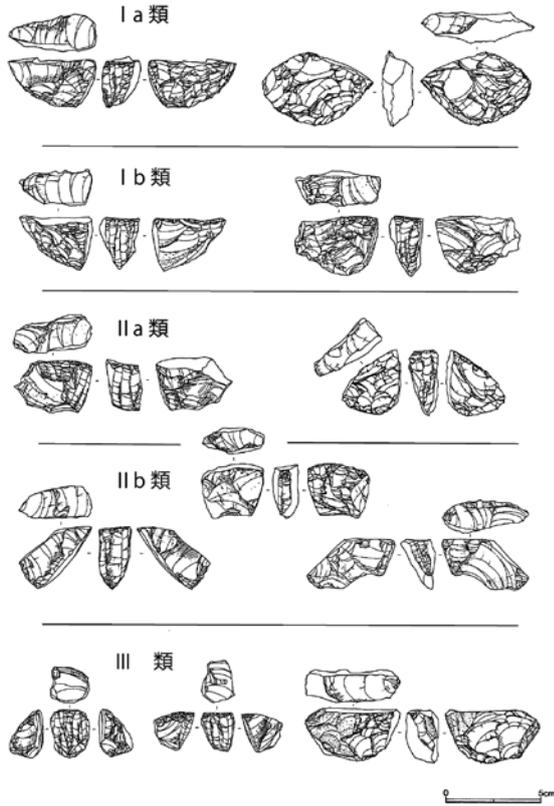


図15 中ツ原遺跡に見る石核構成

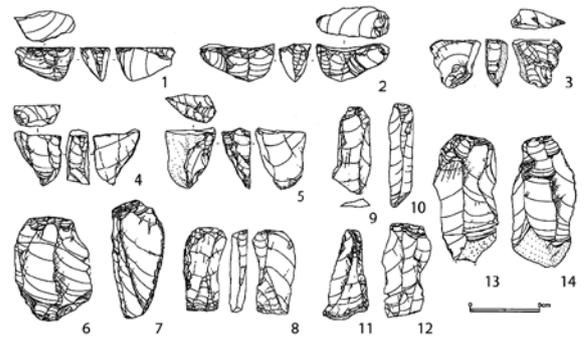


図17 芳見沢遺跡の石器群構成

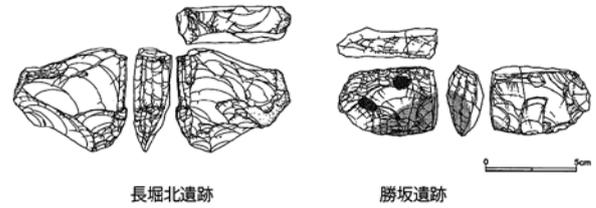


図18 南関東の細石刃核

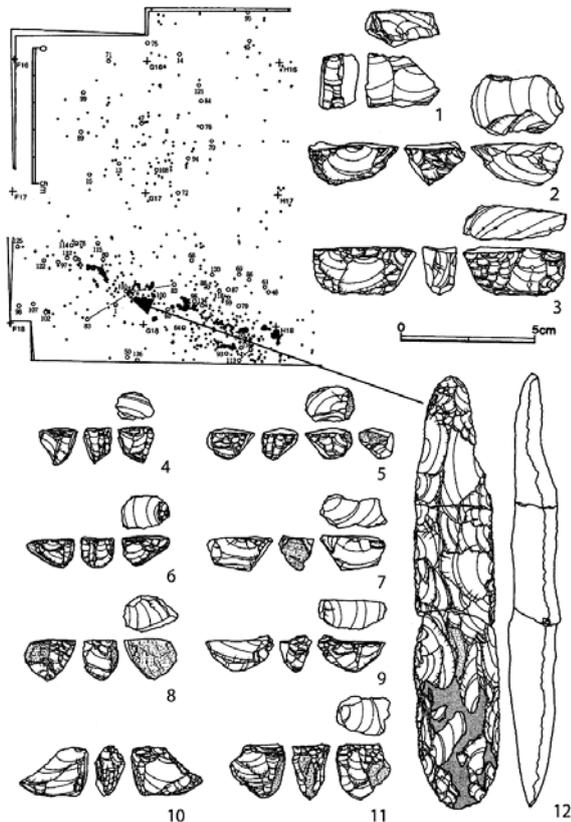


図16 上ノ原遺跡出土資料

こうした編年の位置付けに対する論証は、中部日本の複数遺跡の細石刃核構成等から導き出すことが可能である。一つは長野県中ツ原遺跡から出土している細石刃核群であり、この中部地域でもまとまった数量を誇る資料群も、基本的には「白滝型」との近似的な石核構成を保持していることが明らかである（八ヶ岳旧石器研究グループ1991, 1995）。黒曜石原産地に近い石材環境下で形成された遺跡でありながらも剥片素材の細石刃核群が安定的に出土しており、典型的な「白滝型」のように両面体を遺跡内へと持ち込んで細石刃製作を進めた痕跡は不鮮明で、厚手剥片を素材として打面作出を先行させて後に石核調整が行なわれているものが主体となっている。礫分割に類した資料や厚手剥片のポジ面を当初から打面として石核調整を入念に進めた資料は、結果的には典型的な楔形の形態を呈するに至っている（図15）。

同じ長野県でも最北部に位置する上ノ原遺跡（長野県信濃町教育委員会2008）は、細石器文化の最古段階とされる円錐形・角柱形の細石刃核群に神子柴型石斧が伴出したとされる事例（稲田2001）であるが、石囲い炉内及

び周辺から出土した石斧と同一の分布構成を示す細石刃核群を見ると、殆どが厚手剥片を素材にその主要剥離面を打面として石核調整を行なっている資料Ⅲ類であり、Ⅱb類に相当する資料(図16.9・10)も見受けられる(図16)。細石刃核には分割礫を素材とした一見すると古相を示す資料もあるが、その打面形成は石核調整に総て先行したものであり、打面調整の痕跡は留めていない点も円錐・角柱形としての理解への反証と言えようか。黒曜石製ながらもやや大型の典型的ホロカ型細石刃核を組成する点でも、上原E遺跡や大刈野遺跡と類似し、併行関係にある細石器群として矛盾無く理解されるのである。

関東地方に於ける「白滝型」細石刃核群に併行した細石刃核の様相を追求するのは今後の課題であるが、しかし、相模野台地の神子柴段階としての編年の位置づけが一般的である長堀北遺跡に組成した在地系細石刃核は、明らかにⅡb類に分類可能である。厚手の安山岩を素材として、小口方向からの打面作出の手法は以前にも注視したところであるが(栗島1993c)、このような細石刃核が両面加工体を分割する細石刃核に組成する様相は中ツ原遺跡との系統性を伺わせている。勝坂遺跡の資料についても再検討の余地がある。

尚、併行関係に置くべき石器群の北関東地域での様相は不明である。当該地域では湧別技法を技術基盤に非在地系石材である頁岩を用いた北方系とされる細石刃核と、在地石材を用いて大型の船形に整形されたホロカ型細石刃核が空間を異にして存在するとされている(橋本1993, 1998; 永塚2012)。基本的見通しは正鵠を得たものであ

ろうが、しかし本論で扱った「白滝型」細石刃核群を特徴とした石器群に認められた荒屋型彫器・角二山型搔器の欠落、そして神子柴系石器群との共伴関係を勘案する限り、「北方系」と一括された石器群にも時間差を認めざるを得ない。それ故に「白滝型」に対比すべき資料群を在地のホロカ型細石器群に見いだせないという矛盾が露呈する危惧があり<sup>7)</sup>、今後はホロカ型の由来・系統についても注視してゆく必要がある。そのような観点から群馬県芳見沢遺跡の細石刃石器群(群馬県前橋市教育委員会2005)は興味深く、在地系石材に依拠しながら典型的なホロカ型の細石刃核と共に特徴的な剥片素材の細石刃核群が組成している(図17.3~5)。剥片は小口方向か



「白滝型」の細石刃核は北海道を中心に東日本地域に広く分布する。細石刃核用に両面調整素材を予め準備し、その断ち割り工程で削片複製を剥離することで側面観が船形で正面観が楔形の細石刃核を獲得する、これまで模式図で示されてきた類の白滝型は北海道でも主体ではない。本論で示したように本州地域では剥片や分割礫を素材とし、打面作出後に石核調整が進められて石核形態が形成される例や削片の作出と石核調整が技術工程として一体的に組み込まれた事例が多い。同様な「白滝型」の細石刃核は九州地域にも分布しており、打面部に観察される断面だけでなく技術工程を共有した同一型式として評価できる。

図18 「白滝型」細石刃核の分布

らの加撃によって形成された打面をもち、石核調整がなされないままに細石刃の作出が進められたⅡb類の細石刃核に酷似している。このような素材利用や打面作出はそれまで北関東の在系石材を用いた細石刃核群には見いだされないもので、搔器・彫器(図17.6~8)や大型石刃(図17.9~14)を特徴的に含む石器組成と共に、北関東地域に於ける「白滝型」細石器群の段階へと編年的に位置づけられる蓋然性はたかい<sup>8)</sup>。いずれにしても、これまでの固定的・模式的に捉えられた細石刃核の形態概念を一旦は精算し、新たな技術工程を中心に据えた研究推進を図るなかで細石刃石器群の地域編年を整備してゆくことは急務な研究課題であると認識される。

## 5. おわりに

本州地域に於ける細石刃核群のうち、その打面に擦痕を有する「白滝型」との遭遇は1995年の岐阜県宮ノ前遺跡の調査見学時のことであったように思う。その翌年には新潟県樽口遺跡の資料を見学し、本州地域では予想もされなかった圧倒的数量を誇る「白滝型」が、多数の削片・剥片類との接合関係を成立させていることに驚嘆したことを今でも鮮明に思い返す。その後は新資料の増加は進まなかったが、同様に細石刃核の打面に擦痕が施された資料が九州地域に分布すること、しかもいずれの資料も著者が神子柴段階と評価する福井Ⅳ層に特徴的に見られる「船野型」であったことから、細石刃核打面を擦るという技術伝統が本州から九州へと波及した可能性を指摘(栗島2000)したものの、新たに広域的な細石刃核製作技術に準じた比較編年について取り組むことは適わなかった。

ところで樽口遺跡や宮ノ前遺跡では「白滝型」細石刃核と神子柴系石器群との伴出関係を予想させるものであったが、その後に発見された上原E遺跡と葉山No.34遺跡では細石刃核と神子柴系石器とが同一ブロック内から出土し、両者の同時性について肯定的な立場をとる研究者も多い(稲田2018)。著者も同じ立場にある研究者の一人であるが、改めて細石器文化の最終末期の様相に関する再検討・再整理の必要性、とりわけ二つ

の遺跡で神子柴系石器群との共伴関係を成立させている「白滝型」の分析検討が急務であることを痛感していた。残念ながら本論では明確な結論を得ること無く、寧ろ新たに浮上した課題の方が多かった感は否めないものの、その石核打面への擦痕を唯一の手掛かりとして認定されてきた「白滝型」細石刃核の多様性については指摘できたものと考えている。今後、同様な呼称をもって当該石器群を捉えることが有効であるのか否か、是非、別の機会を得て論じたいと考えている。

## 謝辞

湯ノ花遺跡出土資料の観察・分析等では渋谷孝雄氏に、葉山No.34遺跡の資料については佐久間光平・吉田桂の両氏にお世話いただいた。長崎潤一・須藤隆司・堤隆・小菅将夫・諸星良一の諸氏には当該期資料に関する議論にお付き合いただいたことをこの場を借りて感謝したい。なお、本論は査読者の適切な指摘によって内容・体裁が大きく改善された点も付記し、深く感謝申し上げたい。

## 註

- 1) 白滝型と認定されている細石刃核の定義には多くの問題がある。札滑型やホロカ型のように打面形成や石核調整・形態など一連の技術工程との相関性、矢出川型のような素材形状や石核構成面の特徴、打面調整の有無などとの関連性を型式認定に含んでおらず、以下で検討する本州地域で認められるような打面部への擦痕だけが認定根拠とされている現状は早急に払拭される必要がある。既に北海道地域に於いて懸念が表明されているように「擦痕が付けられていることを白滝型の必須条件としたならば、黒曜石以外の白滝型は存在しない」(寺崎・宮本2003)ことになってしまう危惧がある。改めて本州地域の白滝型を分析・検討することが急務とされる所以でもある。
- 2) またここ樽口遺跡では細石器文化層をA-MH文化層とA-MS文化層とに区分しているが、両者を分布や石器型式などから分ける根拠には肯首できない。同一の石器群をして理解すべきであろう。搔器や彫搔器などの石器がA-MH文化層に偏在するのは、これらの器種の製作が主に頁岩を用いていることと関係しているであろう。
- 3) 吉崎氏が提唱されたこの白滝型(吉崎1959)では両面体の石核原形と削片(舟形・スキー状)の剥離、そして擦痕の存在が指摘されている。その属性を明確化されたのが鶴丸氏であり、複数の工程的属性を掲げたくえで白滝型の型式学的特質の抽出を試み、今日まで続く白滝型の型式認定の範疇を規定するに至っている(鶴丸1979)。また列島の細石刃核群を総括的に論じた安森氏は、白滝型を打面部への擦痕は無論のこと「精緻な加工を施された石核用両面調整素材」を特徴とし、「石核用素材の断

- ち割りを目的とした」削片剥離によって成立していることを指摘された(安蒜1979)。両氏が掲げた白滝型の技術型式の属性は北海道東部域出土の典型事例から演繹されたもので、広域的な有効性の検証は今日的な研究課題との印象が強い。
- 4) 湯ノ花遺跡や樽口遺跡、そして上原 E 遺跡でも少数ながら両面加工原形からの製作工程を示す、断面三角形のファーストスポールやスキー状スポールなどが確認でき、一定の数量の細石刃核原形が持ち込まれていたことは否定できない。だが、そこには模式図から理解されるような典型的な原形は存在せず、実態は剥片素材の半両面や片面加工のものが圧倒的に多い。この点に関しては須藤氏が「白滝型技術」として紹介しているとおりであることを追認しておきたい(須藤2009)。
- 5) 上原 E 遺跡では黒曜石以外の石材による細石刃核構成が見られるが、黒曜石製の白滝型と組成する頁岩・凝灰岩製の細石刃核群ではⅡ類の剥片素材が優勢である。特に頁岩製品では2点のホロカ型の船形例を除き、いずれも剥片素材であることは看過できない。近接地にある正面中島遺跡・荒屋遺跡などを念頭に置く限り編年的な背景があるのか、それとも石材環境等によるものであるのかが次の研究課題となろう。
- 6) そのような意味に於いても今後の当該期石器群、とりわけ北方系と言われる湧別技法関連資料については木村氏が提唱された「技術複合」という概念(木村1997)での複合・重層的な技術理解が不可欠であると考えている。本論の構想段階に於いても氏の提唱する「幌加・湧別テクノ・コンプレックス」概念での当該期石器群の再評価を考えていたが、著者の理解・準備不足でなし得なかった。次なる課題として研鑽を積んで行きたい。
- 7) この対比を果敢に試みた須藤氏の編年表(須藤2012:第1表)に見るように、白滝型を認める場合にその対比資料は不在とならざるを得ない。このような対比を考える場合、氏の勝坂遺跡の細石刃核の技術的特徴を北海道地域の忍路型と同等であることを認めた点は秀逸であったと言わざるを得ない(須藤2009)。
- 8) 同様な石器群は北関東では荒砥北三木堂遺跡や宮脇 A 遺跡、額田大宮遺跡、沖餅遺跡などが該当し、また南関東では狭山 B 遺跡、向郷菩提遺跡、林子原台遺跡などにも類似した石器群構成が認められている。

#### 引用参考文献

- 安蒜政雄 1979「日本の細石核」『駿台史学』47: pp.152-183  
 稲田孝司 2001『遊動する旧石器人』, 198p., 東京, 岩波書店  
 稲田孝司 2018「神子柴石器群の成立過程とその意義」『シンポジウム神子柴系石器群とはなにか』, pp5-10, 長野, 浅間縄文ミュージアム  
 加藤 稔 1992『東北日本の旧石器文化』, 336p., 東京, 雄山閣  
 木村英明 1997『シベリアの旧石器文化』, 426p., 札幌, 北海道大学図書刊行会

- 栗島義明 1993a「湧別技法の波及一削片系と在地系の細石刃核について」『土曜考古』17: pp.1-37  
 栗島義明 1993b「移行期の諸問題 一岡本論文によせて」『シンポジウム1 環日本海における土器出現期の様相』, pp.175-177, 新潟, 日本考古学協会1993年度新潟大会  
 栗島義明 1993c「細石器文化の終焉」『細石器文化研究の新たな展開』, pp.88-102, 長野, 佐久考古学会  
 栗島義明 2000「神子柴文化の拡散と展開」『九州の細石器文化Ⅲ』, pp.33-42, 鹿児島, 九州旧石器文化研究会  
 栗島義明 2010「擦痕を持つ細石刃核」『利根川』32: pp.15-25  
 栗島義明 2020「神子柴論争」の行方『資源環境と人類』10: pp.1-23  
 栗島義明 2021(投稿中)「神子柴遺跡出土の両面加工石器」『考古学集刊』  
 群馬県前橋市教育委員会 2005『柏倉芳見沢遺跡 柏倉落合遺跡』, 112p., 群馬, 前橋市教育委員会  
 小菅将夫 1994「群馬県内出土の細石核2例」『群馬考古学手帳』4: pp.1-6  
 佐久間光平 2015「本州における「打面に擦痕のある黒曜石製細石刃核」の新たな事例と石器群の評価について」『宮城考古学』17: pp.57-72  
 佐藤雅一 2018「大刈野遺跡の理解に向けて一新潟県魚沼地方の活動痕跡一」『旧石器時代文化から縄時代文化への潮流』, pp.225-236, 東京, 六一書房  
 佐藤雅一 2020「中部北部の移行期<上原 E> 大刈野遺跡を中心に」『シンポジウム 旧石器から縄文へー中部日本の地域的様相一』, pp.9-16, 東京, 明治大学黒曜石研究センター  
 芝 康次郎 2011『九州における細石刃石器群の研究』, 296p., 東京, 六一書房  
 須藤隆司 2009「細石刃技術 一環日本海技術と地域技術の構造と組織一」『旧石器研究』5: pp.69-97  
 須藤隆司 2012「赤城山麓を遊動する細石刃狩猟民」『北関東地方の細石刃文化』, 岩宿フォーラム2012/シンポジウム予稿集, pp.81-88, 群馬, 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会  
 杉原荘介・戸沢充則 1975『北海道白滝服部台における細石器文化』, 116p., 東京  
 建石 徹・加藤 稔・渋谷孝雄・会田容弘・小菅将夫・二宮修治 2012「山形県湯の花遺跡・群馬県稲荷山V遺跡出土の黒曜石資料の産地分析」『北関東地方の細石刃文化』, 岩宿フォーラム2012/シンポジウム予稿集, pp.90-94, 群馬, 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会  
 建石 徹・加藤 稔・渋谷孝雄・会田容弘・小菅将夫・二宮修治 2014「山形県湯の花遺跡出土の黒曜石資料の産地分析(第2報)」『岩宿』3: pp.7-17  
 鶴丸俊明 1979「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』47: pp.23-50  
 寺崎康史・宮本雅通 2003「北海道西部の細石刃文化」『シ

- ンポジウム 日本の細石刃文化 I』, pp.175-177, 長野,  
ハヶ岳旧石器研究グループ
- 永塚俊司 2012「荒屋型細石刃石器群の諸相—荒屋遺跡と関  
東の事例を中心に—」『千葉大学文学部考古学研究室30  
周年記念 考古学論攻1』, pp.71-108, 千葉, 千葉大学  
文学部考古学研究室
- 長野県信濃町教育委員会 2008『上ノ原遺跡発掘調査報告  
書』, 85p., 長野, 信濃町教育委員会
- 橋本勝雄 1993「略説・日本細石器文化の現状と課題」『史館』  
24 : pp.1-22
- 橋本勝雄 1998「関東細石器考」『千葉県立中央博物館研究  
報告』5 (2) : pp.117-135
- 日本考古学協会 1999『海峡と北の考古学』資料集1,  
364p., 日本考古学協会1999年釧路大会
- 新潟県朝日村教育委員会 1996『奥三面ダム関連遺跡発掘調  
査報告書V 樽口遺跡』, 188p., 新潟
- 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会 2018『上原E遺跡 —  
国営農地再編 整備事業に伴う発掘調査報告書—』,  
273p., 新潟
- 宮城県考古学会 2018『宮城の旧石器時代遺跡』, 116p., 仙台
- 宮川村教育委員会 1998『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』,  
442p., 岐阜
- 湯沢町教育委員会 1988『大刈野遺跡』, 78p., 新潟
- 山田 哲 2006『北海道における細石刃石器群の研究』,  
244p., 東京, 六一書房
- ハヶ岳旧石器研究グループ 1991『中ツ原第5遺跡 B地点  
の研究』, 230p, 長野
- ハヶ岳旧石器研究グループ 1995『中ツ原第1遺跡 G地点  
の研究I』, 128p, 長野
- 吉崎昌一 1959「北海道白滝村 Loc.30の石器群」『考古学手  
帖』6 : pp.2-4
- 若月省吾 1980『笠懸村稲荷山遺跡』笠懸村教育委員会,  
144p., 群馬

# Reexamination of Shirataki type microcore

Yoshiaki Kurishima<sup>1\*</sup>

## Abstract

Development of microlith culture is seen in the final phase of the Paleolithic all over the Japanese archipelago. Various forms of microcore composition are known especially in eastern Japan where many sites of this phase are discovered, characterized by Satsukotsu and Shirataki types of microcore by Yubetsu technique in the latter half of the phase.

While production of microcores by Yubetsu technique, especially Satsukotsu type, was known to exist in Honshu region, distribution of Shirataki type microcores were considered to be limited to Hokkaido for a long time. However, the existence of Shirataki type microcores is confirmed not only in Tohoku region but as far as Chubu/Kanto regions in recent years. In addition, it is important that Shirataki type microcores are often accompanied with lithics of Mikoshiha lineage (stone axes or spearheads) suggesting a high possibility of the lithics including the microlith undertaking the transition from the Paleolithic to the Jomon period.

This article discussed Shirataki type microcores excavated from Honshu region, and pointed out the possibility of localization in the region, rather different from the technological characteristics that have been advocated in the past. In addition, it was inferred that such technological characteristics were diffused from Honshu to Kyushu.

**Keywords:** Microcore, Shirataki type, Mikoshiha lineage industry, Yubetsu technique, Horoka-type

(Received 10 January 2021 / Accepted 2 February 2021)

---

<sup>1</sup> Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 1-6-3 Kanda-sarugaku-cho, Chiyoda, Tokyo 101-0064, Japan

\* Corresponding author: Yoshiaki Kurishima (yo\_kuri@meiji.ac.jp)